

白露の色はひとつを

——体言接続の「接続助詞」の「を」の用法を検討し、接続助詞の本質におよぶ——

遠藤 和夫

一

本稿の表題にかかげた「白露の色はひとつを」という句は、『古今和歌集』巻第五、秋歌下にみえる、藤原敏行朝臣の

白露の色はひとつを | いかにして秋のこのはをちぢにそむらむ〔二五七〕

という和歌の第一・二句である。てぢかなところにある谷鼎氏の『古今和歌集評解』（有精堂刊）や西下経一氏の『古今和歌集新解』（明治書院刊）をひもといてみたが、このような選釈物の注釈書では、注釈をほどこさなくとも意味の通じるもの、あるいは注釈に値しないような平凡な歌という評価をあたえられてか、省かれ組の一首とされている。それほど平易なうたとかんがえられているものではあるが、筆者の「目」には、一筋縄ではいかない問題点を包蔵しているものとして映っている。ちなみに、窪田章一郎氏の『続日本古典読本』によって、口語訳をしめすと、つぎのごとくである。

(0) 白露の色は一つ色であるものを、どのやうにして、秋の木の色を千々の様々の色に染めるのであらう。（八七ページ）

この口語訳と原文とを対照させてみると、「色はひとつを」の「を」は、「デアルモノヲ」に対応していることが知れる。この対応を、つとに尾張の国学者、横井千秋が気づいていたことを、本居宣長は『古今和歌集遠鏡』の中に、「千秋云。ひとつをの「を」は、ものをの意にて、ひとつなるものをといへるなり。」〔筑摩書房版、第三巻、八八ページ〕と注記紹介している。また、近くは、橘誠氏が、『古今

和歌集の解釈と文法』(明治書院刊)で、「〇ひとつを——ひとつなるを」の意。「を」は逆接の接続助詞。「(一〇五ページ)」と注している。これら先学たちの解釈は、一わたりは聞こえるように感ぜられはするものの、果して「接続助詞」ときめつけてよいものだろうかという、ごく初歩的な疑いをいだく。なぜならば、いわゆる「接続助詞」なるもの、活用語に接続するのに、ひとり、この「を」のみ、体言に接しているからである。そこで、この類の「を」に検討を加えて、「接続助詞」の本質に迫ってみようと、筆を執る次第。

二

まず、体言に接続する、いわゆる「接続助詞」かとおもわれる「を」の諸例を例挙する。

(1) 秋山のしたへる妹、なよ竹のとをよる子らは、いかさまに思ひ居れか、^{たくなは}栲縄の長き命を(長命乎) 露こそは朝に置きて夕は消ゆといへ、霧こそは夕に立ちて朝は失すといへ [万葉2二七。本文は、澤瀉久孝『萬葉集全注 本文篇』による。傍線筆者、以下同じ。]

この歌は、小学館の『日本古典全集』の頭注に「長き命を——当然ならば長生きする命であるのに。このヲは逆接。」(一七八ページ)と注せられている。「接続助詞」とは明言していないが、「逆接」と注記する以上は、「接続助詞」と解釈していることが推せられる。

(2) 気の緒に思へる吾を(念有吾乎) 山ぢさの花にか君が移ろひぬらむ [万葉7一三六〇]

この歌の「を」の場合も、「接続助詞」とはいわれていないが、武田祐吉博士の『増訂萬葉集全註釋』六に「ワレヲは、わたしだのの意。」(四八六ページ)とされ、澤瀉久孝氏の『萬葉集注釈』にも「命がけて思つてゐる吾なるを、の意」(三三一ページ)とされている。この訳からみると、(1)と同じもののように見える。

(3) いくばくも生けらし命を(不生有命乎) 戀ひつつぞ吾は息づく 人に知らえず [万葉12二九〇五]
小学館の『日本古典文学全集』の頭注に「行けらし命を——(略)ヲは名詞についても逆接を表わすことがある。ここもその一例。」(二九九ページ)とあって、これもまた「接続助詞」と解せられているように思われる。

(4) ひさかたの雨の零る日を(雨零日乎) 我が門に簑笠着ずて来る人や誰 [万葉12三二二五]

これも小学館の『日本古典文学全集』の頭注に「雨を降る日を——このヲは、くであるのに、という逆接的な意味に用いてある。」とみえ、同類である。

(5) うぐひすのなくをよめる

そせい

こづたへばおのがはかせにちる花をたれにおほせてこころなくらむ〔古今2一〇九〕
橘誠氏の『古今和歌集の解釈と文法』に「^{四・体}散る花を」^{接助}と品詞分解している。

(6) かむなりのつばに人人あつまりて秋のよをしむ歌

よみけるついでによめる

みつね

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらむ人さへぞうき〔古今4一九〇〕

窪田空穂『古今和歌集評釈』に、「〇をしと思ふ夜を 明けるのが惜しいと思われる夜であるのに」『窪田空穂全集 第二十五巻』二五一ページと語釈がほどこされている。「接続助詞」とは、明言されていないが、意味上、そのように解釈しているようにみえる。

(7) 貞観御時、綾綺殿のまへに梅の木ありけり、にし

の方にさせりけるえだのみぢはじめたりけるを

うへにさぶらふをのこどものよみけるついでによ

める

藤原かちおむ

おなじえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ〔古今5二五五〕

『古今和歌集の解釈と文法』には「^{形・体}同じ枝を」^{接助}と品詞分解をし、「同じ枝を——「同じ枝なるを」の意」(二〇四ページ)と注をほどこす。また、小学館の『日本古典文学全集』の頭注にも、「を」は接続助詞だが、ここでは体言についている。「を」によって接続される二つの句の関係には順接と逆接との場合があるが、ここでは逆接。」「(二四一ページ)とする。

(8) おほさはの池のかたにきくうゑたるをよめる

ひともと思ひしきくをおほさはの池のそこにもたれかうゑけむ〔古今5二七五〕

小学館の『日本古典全集』の頭注に「一本だと思った菊なのに。「を」は接続助詞が体言についたもの。」「(二四七ページ)とみえる。

(9) こひしくは見てもしのばむのみぢばを吹きなちらしそ山おろしのかぜ〔古今5二八五〕

窪田空穂の『古今和歌集評釈』に、「〇紅葉を「紅葉」は、もみじ葉の落葉の意。「を」は、詠嘆で、なるものを。」「(三三四ページ)と

注す。例によつて「接統助詞」とはいわれていないが、通釈に「恋しかつたらば、それを見て偲ぼうと思うもみじの落葉であるものを、吹いて散らすな、山おろしの風よ。」としているので、この一類に属するものかと考えて、採集してみた。

(10) わらび

真せいほうし

煙たちもゆとも見えぬ草のはをたれかわらびとなづけそめけむ〔古今10四五三〕

藤川忠治氏の現代語訳に「葉火なら、煙が立って燃える筈だが、そうとも見えぬ、ただ野山に萌え出る草の葉であるものを、誰がまあ、わらびという名を、つけはじめたのであろうか。」〔現代語訳 日本古典文学全集〕(河出書房刊) 一四九ページ〕とある。この訳にしたがうと、「を」は接統助詞と解釈せられているようにみえるので、この類の一つとした。

(11) 枕より又しる人もなきこひを涙せきあへずもらしつるかも

〔古今13六七〇。平貞文〕

西下経一氏は、『古今和歌集新解』の「語釈」の項で、「を」は「もらす」の客語を示す単なる格助詞ではなくて、逆態的な詠嘆をあらわす。〔二四二ページ〕と注し、「単なる格助詞」をしりぞけている。「逆態的」とは、何を意味するか、西下氏の説明がないので完全な理解は困難であるが、おそらく「逆接的な」と同義ではないかとおもう。

(12) をれるさくらをよめる

つらゆき

たれしかもとめてをりつる春霞たちかくすらむ山のさくらを〔古今1五八〕

窪田空穂の『古今和歌集評釈』には、「を」は詠嘆の助詞で、なるものをの意。〔二二八ページ〕とみえ、藤川忠治氏は、「誰がまあ、尋ねて行って、折りとったのであるか。春霞が立って隠しているだろう、山のさくらであるものを。」〔三五ページ〕と訳を付している。「接統助詞」なる名称は、用いていないが、訳の上からは、それに類似している。

(13) けにこし

やたべの名実

うちつけにこしとや花の色を見む おく白露のそむるばかりを〔古今10四四四〕

新註国文学叢書の頭注には、「染めてゐるだけなのに。」〔二六六ページ〕と訳し、窪田空穂氏の『古今和歌集評釈』には、「を」は詠嘆。染めるだけであるものをで、しげく置いている露に濡れて、花の色が増して、本来の色よりも一段と濃くなると見たもの〔四六一ページ〕とみえる。

(14) かはなぐさ

ふかやぶ

うばたまの夢になにかはなぐさまむ うつつにだにもあかぬ心を〔古今10四四九〕

『古今和歌集評釈』は「飽かぬ心を 堪能たんのうできない心であるものを。」と注する。

(15) ふじのねのならぬおもひにもえばもえ 神だにけたぬむなしけぶりを〔古今19一〇二八。きのめのと〕

藤川忠治氏の訳によると、「富士山のように、成就しない戀の思いの火で燃えるならば燃えよ。萬能の、その神でさえも、消さぬ、甲斐のない煙であるものを。」〔三一―ページ〕とある。(12)以下、「接統助詞」とはいわれていないが、訳の上から、類似のものとかんがえて、一往、採集してみた。

『万葉集』や『古今和歌集』場合は、注釈書の類は、玉石混淆であるとしても潤沢であるから、その例を示しやすいが、『後撰和歌集』や『拾遺和歌集』では事情が異なる。『古今和歌集』のごとく、多くの例を示すことは困難であるが、北村季吟の『八代集抄』を参考に、して、『古今和歌集』の例を範にとって類歌をさがした結果、次のようなものが、その例として、選出せる。

(16) 月影はおなじひかりの秋のよをわきて見ゆるは心なりけり〔後撰6三二六〕

『八代集抄』には、「八月十五夜とおもふ心に、とりわきて見ゆると也」と注せられている。一尾の意味は、「月はおなじ光で照っている秋の夜デアルノニ、とりわけ美しく見えるのは、八月十五夜―中秋の名月―と思う心からであった」というほどの意味であろう。

(17) おとにのみききつるこひを人しれずつれなき人にならひぬるかな〔拾遺11六四一〕

これは注をつけるまでもなく解しやすい一首である。『八代集抄』には、「恋といふ事を、音にききて身にはし。ら。ざ。り。し。に。、人の難面きにて、人しれず心に知しと也」〔圈点筆者〕ととかれている。

(18) さやかにも見るべき月を我はただ涙にくもるをりぞおほかる〔拾遺13七八八〕

この歌は、源実明の

恋しさはおなじ心にあらずともこよひの月を君見ざらめや

という歌にこたえたもの。『八代集抄』に「同じ心にあらずともとあるにこたへて、我も同じく君をこふるとはいはんとて、泪に曇る折ぞおほきとよめり」と注してある。一首の意は、「さやかだと見るはずの月デアルノニ、私はただ君を恋うる涙がちで、その涙で月もく

もつて見える折が多いのである」というほどの意味であろう。

文末に「を」とある例は、

(19) 四五月ばかり、とほきくにへまかりくだらむとす

るころ、郭公をききて

ほととぎすきては旅とや鳴渡る 我は別のをしき宮こそ〔後撰4一七六〕

『八代集抄』に、「郭公はこゝを旅とて住うさに鳴やらん、我は古郷なれば別がたき都なる物をと也」と注する。一首の意味は「ほととぎすは都にやつて来ても旅先だからとて鳴いているのかしら。自分にとっては故郷であるから、別れがたい都デアルノニサ」といったほどの意味であろう。

(20) なにゝかは袖のぬるらん 白浪のなごり有げも見えぬ心を〔後撰12八八五〕

この歌、朝忠朝臣が留守の大輔をおとずれた翌朝「いたづらに立帰りしに白浪のなごりに袖のひる時もなし」とよんだ歌の返歌である。一首の意味を、『八代集抄』に「名残有げもなき御心ばへと見おきつるに、袖のぬれしとの給ふは、まことしからずと也」と釈する。

(21) 元長のみこに夏のさうぞくしておくるとそへた

りける

南院式部卿のみこのむすめ

わがたちてきることそうけれ 夏衣おほかたとのみ見べきうすさを〔後撰14一〇五四〕

『八代集抄』に「君が心ざしのうすさを、大かたにも見てあるべき物を、我たちて、君がきることそうけれ。いよいよ御心うすくならんと、ふくめたる心也。」と注する。

以上が『万葉集』および三代集中の、体言に下接した「接続助詞」かとおもわれる「を」の例である。もとより、「ぎる」のような目で求めたので、多くの類例を漏らしていることがあるが、ほぼこの程度ひろいあげれば、およその見当はつくのではなからうかと、甘い考えでいる。

さて、機械的な目で網羅したものではないが前節に、体言接続の「接続助詞」かとおもわれる「を」の例をかかげた。これらに対するとりあつかいかたは、人により、参考文献の性格によりさまざまで、あるものは「接続助詞」と明言し、あるものは、単に「逆接」とか、「逆態的な詠嘆をあらわす」とかしか指摘しない。しかし、「デアルモノヲ」に対応するものであるという意識だけは、共通しているようである。

これら、二十二例を整理してみると、(甲)「を」が文中に位置している場合と、(乙)「を」が文末に位置する場合との二種に分かれたれ、(乙)はおよそ(甲)の変形——いわゆる「倒置法」をとった形とでもいうことが可能な諸例であるが、(乙)の場合は「詠嘆的気分」「余情効果」が強く感ぜられる傾向にある。筆者は、助詞を分類するに際して、その助詞の置かれている位置が重要なポイントをしめていこうと考えているが、その点からすると、(乙)は、純粹な意味での「接続助詞」とはいえない。接続助詞の「終助詞的用法」というものが承認するならば、「接続助詞」ともいえる可能性はあるとしても、「接続助詞」本来のすがたとはいえない。

作品 位置	万 葉	古 今	後 撰	拾 遺	計
(甲) 文 中	(1) (2) (3) (4)	(0) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11)	(16)	(17) (18)	15
	4	8	1	2	
(乙) 文 末		(12) (13) (14) (15)	(19) (20) (21)		7
	0	4	3	0	
計	4	12	4	2	22

次にその使用頻度をみると、上掲の表のごとく、『古今和歌集』がもつとも多く、それを頂点とする山形の曲線を描くという現象をしめしている。この現象は、現代語訳「デアルモノヲ」に対応する、体言接続の「を」の使用が、『古今和歌集』のころに一時的に好まれ、固定し、その後は『古今』の模倣におこなわれたにすぎないのではないかという仮説もなりたつかもしれないという印象をうける。だが、その基礎となるデータは、あまりにも主観的すぎる。今回の調査のような、解釈に土台をすえた資料による、文化科学における計量的処置は、非常

に脆弱なものである。多数の中のただの一例でも、万鈞の重さをもつ場合もあるが、湮滅しきつた数多くの言語資料の中にわずかに残存した例、それも後代の我々が勝手に解釈した例が、数値上、たとえ一〇〇パーセントの確率をもって、ある種の答えを出しえたとしても、それは解釈が変われば、ついえさるべき運命にあるのである。その脆弱さをあらためて痛感させられたので、別の面からの検討を加えることにした。

四

これまで、筆者は「白露の色はひとつを」の「を」が「デアルモノヲ」に対応するものであるという方向で、例をさがしてきたのであるが、多くの例の中には、この範疇に属さないものもあつたのである。

22人こそはおほにも云はめ、我がここだしのふ川原を(師努布川原乎) 標結ふなゆめ(万葉7 一二五二)

右の歌の「大意」は、日本古典文学大系では、「ほかの人こそ、平凡な景色だというかもしれないが、私がこんなに賞美している佐保川の川原なので。から、シメなど決して結われないで下さい。」と記してある。この訳によれば、「を」は「デアルノニ」に対応するのはなく、「デアルノデ」に対応していることになる。

23ぬば玉の昨夜はかへしつ。今宵さへ吾をかへすな。路のながてを(路之長手乎)(万葉4 七八二)

これは、「を」が文末に位置する場合である。武田祐吉博士の「増訂万葉集全註釋」では、「長い道中なるものを歸すなの意」(三三三ページ)とし、澤瀉久孝氏の「萬葉集注釈」では、「この「を」は單なる格助詞と見るより、「なるものを」の意をこめた詠嘆の助詞と見た方がよい」(六〇九ページ)とされている。この「なるものを」はデアルノデの意と思われる。

この「を」は決して「万葉集」にだけみえるものではない。「古今和歌集」でも、次のようみえる。

24いのちやはなにぞはつゆのあだ物をあふにしかへばをしからなくに(古今12 六一五)

谷鼎氏の「古今和歌集評解」に、「あだものなるを、の意」(二六二ページ)と注し、「口譯對照古今和歌集」(池田正俊・安田喜代門共著)には、「なに、この命なぞはどうせ露のやうな果敢ないものなのですから、思ふ人と逢へさへすれば死んでも惜しいことはないのですよ」と訳してある。

25 世中のはかなきことを思ひけるをりにきくの花を

見てよみける

つらゆき

秋の菊にほふかぎりはかざしてむ 花よりさきとしらぬわが身を〔古今5二七六〕

佐伯梅友氏は、日本古典文学大系の頭注に、四・五句を「菊の花の枯れるのより先に死ぬかもわからないわが身なのだから」〔一五六ページ〕と口訳する。「を」は「ナノデアルカラ」に対応する。

右にかかげた24から29までの四例は、管見のおよぶかぎりの注釈書類には、「接続助詞」の「を」とは記されていないが、その意は「なるものを（『デアルノテ・デアルカラ』とされる。形態的には、第二節にかかげた諸例と同じく「体言＋を」の「を」ではあっても、逆接の意味ではなく、後続の文に対して、理由をあらわす、いわゆる順接のはたらきを持つているようにみえる。こうしてみると、「を」は、従来の説のごとく「逆接の接続助詞」だけではありえない。少なくとも、「逆接の接続助詞」とするのは、偏狭な見解であるといわざるをえないのである。

五

前節では、意味の上からみると、その用例中には、後続文の理由を示している「を」のあることを明らかにし、「逆接」の接続助詞にとどまらないことをのべたのであるが、視点をかえて観ると、体言接続の「を」には、また別の問題があるのである。そこで、『万葉集』などの諸例に目を向けて、検討を続ける。

29 家にあれば^けに盛る飯を（^{いひ}筭^け盛飯乎）草枕旅にしあれば、椎の葉に盛る（万葉2一四二）

この歌は、斉明天皇の四年、天皇の旅行中に蘇我赤兄にそそのかされて、反逆を企てたかどで捕えられた有間皇子が、紀州、湯崎温泉まで連行される途次、自傷して詠んだという、有名な歌である。この歌の中の「筭に盛る飯を」の「を」は、一般には「格助詞」と解し、誰一人としてこれに疑いをさしはさむことをしないのである。しかし、臍まがりな筆者には、少し観点をかえてみると、「体言接続」の接続助詞の「を」として、「家にいる時には、筭に盛る飯デアルノニ、旅行中のこととて椎の葉に盛ることだ」と解釈することも可能であると考えられる。普通は、「格助詞」とされるものでも、「接続助詞」とすることが可能な例をさがしてみると、かれこれある。

27 二人行けど行き過ぎ難き秋山を(秋山乎) いかにか君がひとり越ゆらむ〔万葉2一〇六〕

28 烟子らが夜晝と云はず行く路を(行路乎) 吾はことごと宮道にぞする〔万葉2一九三〕

29 はしけやし間近き里を(不遠里乎) 雲居にや戀ひつつ居らむ 月も經なくに〔万葉4六四〇〕

30 ……望月のたれる面輪に花の如、笑みて立てれば、夏蟲の火に入るがごと、みなと入りに船こぐ如くゆきかぐれ、人の言ふ時、いくばくも生けらじものを何すとか、身をたな知りて、浪の音のさわく湊の奥つ城に妹が臥せる。遠き世にありける事を(遠代尔有家類事乎) 昨日しも見けむがごとと思ほゆるかも〔万葉9一八〇七〕

31 旅にあれど夜は火燭し居る吾を(欲流波火等毛之乎流和礼乎) 闇にや妹が戀ひつつあるらむ〔万葉15三六六九〕

32 朝にけに見まくほりするその玉を(其玉乎) いかにせばかも手ゆかれずあらむ〔万葉3四〇三〕

33 秋くれば月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすばかりを(古今10四六三)

これらの歌を、手元にある注釈書——鴻巣盛廣『万葉集全釈』、武田祐吉^{訂増}『万葉集全註釋』、日本古典文学大系『万葉集』、澤瀉久孝『万葉集注釈』、日本古典文学全集『万葉集』、土屋文明『万葉集私注』——によってみると、大部分の注釈書が、これらの「を」を格助詞と考えている。とりわけ27 30 32は例外なく「格助詞」と認定しているとおもわれるが、28 29 30については、かならずしも「格助詞」とは考えられていない。以下にそれらについてしるす。

まず28に関しては、武田祐吉博士は、「行路乎 ユクミチヲ。行く道なるをの意で、(下略)」と注し、「農夫等が、夜とも晝ともいわず、行く路であつたものを、今は自分が出仕する道とする。」「(五四一ページ)」と訳された。これに対して、澤瀉氏は「行く路を」の「を」を「なるを」と解した説も見えるが、この「を」は結句の「宮道にぞする。」につゞく格助詞である。」「(三三六ページ)」と注を付している。筆者は、ここでその説の当否を論じようというわけではない。見解の相違によって「格助詞」とも、また「へなるを」相当の助詞ともなるという事実のあることに注意を喚起しておきたいのである。⁽¹⁾

29の「間近き里を」は、武田博士は「親しむべき近い里なのだが、それを遠方のように思つて戀をしていなければならないのだろうか」「(二三五ページ)」と訳し、日本古典文学大系の「大意」には、「あわれ、間近い里であるのに、雲居のように遠く恋しく思つていなければならぬのであろうか」「(二八五ページ)」とあり、日本古典全集では、「○間近き里を——間近キ——このヲは逆接的な用法。」「(三五

○ページ」と注を付す。これも見解の相違によつて揺れ動く例ではあるが、「格助詞」の雰囲気のないものとかんがえられる。

③①の場合、鴻巣盛廣氏は「○乎流和禮乎——居る我なるをの意。ヲは目的格を示す助詞とも見られるが、さうではあるまい」(五九〇(二五八八)ページ)と注し、これに澤瀉氏は、なぜなのかという根拠は示されなかったが、賛同して、「……と全釋に云はれてゐるのが當つてゐる」といつている。

②⑨③①の例は、見解によつては「格助詞」とも、また「接続助詞」ともとれるもの、いいかえれば、どちらの性格をもそなえていた中間的な存在のようにみえる。この種のものは、『万葉集』には、まだ数多くあることがかんがえられるが、『古今和歌集』では、さすがにすくない。

③③は『古今和歌集遠鏡』に、「ソウタイノ木ハ秋ハ實ガナル物ヂヤガ 月ノ中ナ桂ハ 秋ガキタトテ實ガナルカ 實ハナリハセヌ タゞ秋ハ常ヨリサヤカナ光ヲ花ノヤウニ四方ヘチラスバカリノ事ヂヤモノヲ ソレニ世間デ秋ノ月ヲバカクベツニ賞翫スルハドウ云事ゾイ」〔筑摩書房版『本居宣長全集』第三卷一三九ページ。圈点筆者。〕と訳され、逆接の接続助詞的なものと解せられているが、香川景樹は『古今和歌集正義』の中で、「……といへるは非也 すへて句尾にある を の言は其事をさしつよむる手仁遠波にて其強き方より自然と決定するの意になれり 此解ならはチラスハカリチャといふにてたれり 事チャモノヲといふ意にあらず」〔第二冊、一八一ページ〕と否定しきつてゐる。景樹のこの見解は、現在に至るまで踏襲されているようである。とにかく、宣長は、接続助詞的なものと解したが、景樹は、終助詞的なものと解している。「格助詞」のみならず、「終助詞的なもの」とも共通するような、そんな存在であつたのであろう。論の進行上、前にはふれなかつたが、実は⑦の「おなじえをわきて」の「を」は、橘誠氏自身、「この「を」をば、上に「なる」を補わずに、「同じ枝をわきて」(同じ枝を)とそのままとつて、「同じ枝」を「わきて」の連用修飾語にする格助詞とも解釈できる」(『古今和歌集の解釈と文法』一〇四ページ)とのべていられたのである。

以上、見て来たように、「体言」接続の「を」は、助詞分類上においても非常に不安定な要素をもつたものであつたわけである。

六

前節までは、「和歌の世界」での用例について検討を加えてきたのであるが、散文の世界ではどうであつたであらうか。膨大な言語量

を擁する『源氏物語』『枕草子』などの例を調査はしているのだが、今回の論には全貌をうかがうにたるだけの整理ができなかったので、くわしくは稿を改めることにして、ここでは、先学によって指摘された例について、考察を加えようと思う。

此島正年氏は『国語助詞の研究』の中に、『竹取物語』『源氏物語』『今昔物語集』から各一例ずつ掲げている。それらは、

34 よくもあらぬかたちを、深き心も知らであだ心つきなば、後くやしきこともあるべきと思ふばかりなり。(竹取)

35 朝の露に異ならぬ身を、何をむさぼる身の祈にかと聞給ふに(源氏、夕顔)

36 汝ハ人ニモ非リケル者ノ心ヲ、我レ近クテ見ル事ナム否有マシキトテ(今昔、二十四・第五十)

である。35の本文は、「露にことならぬよを(河内本、世に)」でなければならぬが、「身を」となっている点、いずれの『源氏物語』によったのか、不審である。諸注釈の訳は「世であるのに」としているが、白子福右衛門氏は、この「を」を格助詞と認定している。そこには白子氏の見識があるのであるが、その根拠はあきらかではない。

『今昔物語集』の例は、引用されたかぎりでは、此島氏の意見どおりになるかもしれないが、同じ語(説語)の少し前の部分に

汝ハ、心疎ク、人ニモ非リケル者ノ心カナ

とあるが、それに対応していると思われる。つまり、引用文は「人ニモ非リケル者ノ心ヲ」で断れるもので、詠嘆的な表現と思われる。永積安明・池上洵一氏の訳では、「お前のような人でなしは、そばに置いておく気にはなれぬ」と訳されている。これでは体言接続の接続助詞の「を」とは、とうてい考えられない。結局、散文の場合は、体言接続の接続助詞の「を」と認めるべきものは、あったとしても、すくないのである。

これまで保留してあった34の『竹取物語』の「を」については、諸注釈書、よく説いてある。岡一男氏や三谷栄一氏は、「を」の原初をおもんじて間投助詞とみ、伊奈恒一氏、吉池浩氏は、格助詞の接続助詞的用法とみている。それらの中で、松尾聰氏は最もくわしく、接続助詞「を」の発生にいたる歴史³⁾、および体言接続の接続助詞が存在する事情を添えて、次のようにのべている。

「かたちなるを」に近い意で、「を」はいちおう接続助詞とみるべきもの。もともと「を」は、感嘆の声で、間投助詞として用いられる(例―二三にては死ぬともあらじ。一にてをあらぬ(第一ノ人デアリタイノデス)(枕草子)のが本義であったが、「梅折る」を「梅を折る」というふうに「折る」対象である「梅」に「を」を添えて感動をあらわしているうちに「節」に「を」が添うようになる

と、それは「梅の花さきし（モノ・梅）を」で、もともとは格助詞として取扱えるのであるが、見たところ「梅の花がさいたけれども」または「梅の花がさいたので」のような意をあらわすもの、すなわち「を」が（逆・順）接統詞」に転用されたものとなった。この場合の「かたちを」は、名詞に直接添っていないながら、いちおう接統助詞としてみられるわけは右の事情による。〔評竹取物語全集〕四一ページ〕

この解説は、非常に親切でわかりやすい。前節で筆者が注意を喚起するにとどめた、述べたりなかったところを補ってくれもする。だが、筆者としては、この例に関しては、「接統助詞」ということには、まだ何の躊躇もなしにとびつく気持ちにはなれない。なぜなら、松尾氏の説明はあまりにもきれいにできすぎているために、大事な何かを見落しているのではないかという危惧の念にかられて、ついでゆけないのである。

七

ところで、これまでにみたように、「体言接統」の「を」のなかには、一筋縄では処理しきれないものがあつたのであるが、それを、我々の現代的な感覚で、やれ「格助詞」の、やれ「接統助詞」のと、確たる原理もなしに、品詞というレッテルを貼り付けてしまうのは、ある意味ではナンセンスな話で、古代人たちが、今日の文法学者ほど分析的な文法意識にめざめていたとは考えがたい。思うに、ある時は「格助詞」とも、またある時には「接統助詞」などとも解釈されうるような、流動的な性格をもった「を」が、とくに和歌の世界で様式化され、後世、我々が「体言」接統の接統助詞の「を」というような用法のものが、生成された可能性があると考えられる。第五節でしめたように、『万葉集』には、流動的な性格の「を」の例が多くみられることと、計量的処理方法には疑惑をもちながらも、第三節で使用頻度の整理したものをしめたように、『古今和歌集』中に、体言接統の接統助詞「を」ではないかとおもわれる例の多いことから、今示した（流動的な性格の「を」が和歌の世界で様式化され^{云々}）という仮説は、あながち荒唐無稽のものではないという感じを強くするが、その究明は今後の研究課題としておきたい。

八

ここで、「接続助詞」が設定された原点に立ち返って、山田孝雄博士の御説をみてみよう。

「を」も亦前後の事實を綜合するに用ゐらるゝものにして連體形につくなり。これも従来齟齬を示すものといはれたるものなれど、その然らざることは「が」「に」におなじ。たとへば、

椎の木、常盤木はいづれもあるを、それしもはがへせぬためしにいはれたるもをかし

これらはいづれも齟齬にあらずして俱存の事實なるは論なし。『日本文法学概論』五四〇ページ

右に引いたのは、接続助詞「を」に関する一節で、ここには、一般的な接続助詞「を」の用法について述べられている。論中の「齟齬を示す」というのは、現在いうところの「逆接」に相当すると考えられる。博士は『枕草子』三八段「花の木ならぬは」の段の一文をかかげ、そこに出現する「を」があい前後する二つの事實の間に置かれ、前後の事實を綜合していることを証明し、「を」が「齟齬を示す」という説を否定された。筆者が問題としてとりあげているのは、「体言接続」の「を」であつて、博士のは「連体形接続」の「を」という点で、相違する条件下にはあるけれども、第四節で筆者が示した△「を」には後続文の理由をあらわす順接の「を」もあり、「を」を「逆接の接続助詞」とするのは偏狭とする考えは、博士の御説の延長線上にあるものであつて、まったくかえりみるに値しないものではないことがしれよう。

これに続けて、博士は、

しかるに往々齟齬せる事をあぐる如く見ゆるはこれその綜合せられたる前後の事實の間にたまたまかゝる現象の見ゆるに止まり、
「が」「に」「を」にかく齟齬を示す力あるにはあらざるなり。〔五四一ページ〕

と論をすすめられ、「接続助詞」として相当に発達していたと考えられる「連体形接続」の「を」も文脈に依存する度合の大きかったことを述べていられる。更には付け加えて、

これ又直に體言に接して述素となり、接続の用をなすことあり。

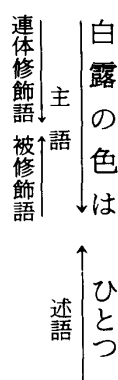
白露の色は一つを、いかにして秋の木のはをちゞに染むらむ〔同ページ〕

と言はれた。管見では「体言＋を」の「を」を「接続助詞」として扱われたのは博士が最初であつたと思われる。後の文法家は、これ
を無批判に自説の中にとり入れ、それで言説をなしているのではないかなどという、僭越な疑いをいだいたりもする。とにかく、博士
は、「を」が「述素」となつてかつ前後の事実を接続・綜合すると考えられたのである。

九

山田博士は、「接続助詞」は「述格として用ゐられたる語（主として用言）に附属して、之を次なる句と接續せしむる用をなす助詞」と
規定なさつた。接続助詞であるための条件として、「を」の上接部分は述格でなければならないのである。博士が、掲げられた「白露の
色はひとつを」の場合、この条件を満たしているであろうか。また、これまでみてきたように、「体言」に接続した、「接続助詞」とみ
とめられそうなものは、「白露を」以外にもあつたのに、山田博士は、なぜ「白露の」だけをかがげられたのであろうか。そこに、この
「を」と「接続助詞」の本質とを説明する鍵がひそんでいるように思える。

最初にかかげた「白露の色はひとつを」の「を」の上接部分の構文は、



という構文であること、疑いのないところである。あの有名な『枕草子』の第一段の「春はあけぼの。やうやうしろく成り行く山ぎは、
……」の冒頭文が、「主語＋述語」の構造になっていると、萩谷朴氏が説破されたが、その「春は あけぼの」「夏は 夜」等と同じ構
造の文であつたわけである。山田博士は「を」に「直に体言に接して述素となり」という作用を認められたが、「を」が「述素」になつ
ているわけではなかつたのであろう。筆者は、「体言」に「を」が接続しているようにみえているが、実は「を」が接続したのは、単に
「ひとつ」という「体言ではなかつたと思う。「白露の色はひとつ」という文に「を」は接続しているものだと考える。そのような観点
で、さきにかかげた諸例をみてゆくとき、この条件を満たしてくれるような適例は見当らないのである。博士が「白露の色は」以外の
用例を引かれなかつたのもむべなるかなと納得がゆくのである。

一〇

以上、くだくだと述べて来たが、最後に「接続助詞」の本質について、一言まとめて筆を擱く。

「助詞」のはたらきは、関係の明示と意味添加に大別されるが、関係明示の役割を荷なうのは、格助詞と接続助詞であることは、言うまでもない。「格助詞」は、主として「体言」に接して、文を構成する際に、単語と単語（あるいは「単語」に準ずる語句群）との関係がどうなっているか、を明らかにするものであるのに対して、「接続助詞」は、「文」と「文」とが統合されて、上位の「文」を構成する際に、「文」と「文」とを結び、その関係を明示する役割を分担しているのである。したがって、当然のことながら、「接続助詞」が接するのは、述語となりうる活用語であることが多いということになるわけである。

注

(1) この「を」に関しては、「忌忍事乎似事」考（『国語研究』二六号三〇ページ）に触れたことがあった。

(2) この記述は次の書物によっている。

岡 一男『竹取物語評釈』（東京堂刊）

三谷栄一『竹取物語評解（改定版）』（有精堂刊）

岸上慎二・伊奈恒一『詳解竹取物語』（桜楓社刊）

吉池 浩『對譯竹取物語新講』（星野書店刊）

(3) 此島正年『国語助詞の研究』（桜楓社）にも「接続助詞」の「を」の歴史が説かれている。松尾聰氏の説とあわせて参照してほしい。

(4) 萩谷朴氏の「枕草子解釈の諸問題」一（『国文学』昭和三十三年十月号、一四六～一四九ページ）および「枕草子解環」一六ページ以下参照。

（本学教授）